大学英語教材に出てくる「提案」「依頼」のスピーチアクト表現の、コーパスに基づいた分析

辻　　建一

1．調査・研究の目的

日本の英語教育において「コミュニケーション能力の育成」が重要視されて久しく、読解や文法の教授が中心だった昔の英語教育に比べて、会話スキルにつながる英語力養成のために、口語表現を覚えさせる指導の機会は増えている。しかし、単に口語表現を色々覚えさせたり、特定のシチュエーションで限定的な口語表現を用いて練習させたりするだけで、本当に英語による会話スキルの向上につなげうるかは疑問である。文部科学省の学習指導要領でも「言語の働き＝スピーチアクト」が重要なテーマとして取り扱われており、色々な口語表現を実際のコンテクストの中で正しく使用できるように指導することが、今後はますます求められてくるだろう。

まずその前提として、言語習得に大きな影響を与える英語教材が、Requesting、Suggesting、Offering、Inviting、Complaining などのスピーチアクトの表現を紹介する際、それらの様々な表現をモデルセンテンスや会話文の中に適切に織り込んでいるかどうかが、大事な問題となる。既存の英語教材に出てくるモデルセンテンスや会話文には、現実の英語の実態とずれているケースもあると言われている。だとすると、大学英語教材のスピーチアクトの表現の標準性を検証したうえで、より実態に即した口語表現を適切に教材に取り込む努力が必要とされるだろう。そして大学英語教材の表現と、実際のネイティブ英語話者の言語使用との、類似・相違点を調べるためには、ネイティブスピーカーが普段使用するいわゆる自然言語の実例が必要となる。

そこで自然言語の実例としてふさわしいデータをどのように取得するかが問題になるが、今回の比較調査では自然言語の実例として、早稲田大学の鈴木利彦准教授が、2007年にアメリカのミズーリ州の英語ネイティブスピーカーの大学生150人以上から、談話完成テストとロールプレイを用いて収集したデータ（スピーチアクトコーパス）を使用した。もちろん、談話完成テストとロールプレイによる収集で得られたデータは、自然の会話の観察によるものではないので、真正性という点では完全なものとは言えないかもしれない。しかしその有効性については、Hartford & Bardovi（1992）や Beebe & Cummings（1996）などによっても検証されてきている。それゆえ、大学英語教材に出てくる表現を、自然言語の実例としてのスピーチアクトコーパスと比較し、その差を調べることは有意義な作業となるであろう。

2．調査・研究の分析手法とデータの集め方

今回は種々のスピーチアクトのうち、Suggesting, Requesting に焦点を当てて調査した。また大学英語教材だけではなく、中学・高校の英語教育の到達目標と考えられるセンターの英語試験における Suggesting, Requesting のスピーチアクト表現も、調査し比較対象とした。

センター試験および大学教材における Suggesting, Requesting の様々な表現を収集・分類・集計する際の、データベースの具体的な作成方法について述べると、まずセンターの試験に関しては、2002年から2011年までの10年間の試験から、また大学教材に関しては、コミュニケーション能力養成を狙いとした14冊の教材から、それぞれ Suggesting, Requesting の表現を抽出していった。そして、センター試験と大学教材から抽出したデータを、ネイティブのスピーチアクトコーパスのデータと比較することを念頭に置き、３つのデータの収集の基準にできるだけ差が出ないように慎重に配慮しながら、多少データの取捨選択を行った。

例えば I'm thirsty のように文自体に Requesting の意味がなくても、文脈を見ると「飲み物がほしい」という Requesting のニュアンスを持っているものもある。最初はいったん、文脈的に Requesting の含意があるそのような例もデータとして拾い上げたが（Suggesting についても同様）、センター・大学教材・ネイティブのそれぞれのデータを比較しやすくするために、その表現自体で Suggesting や Requesting の意味ととれるものに絞った。つまり、３つのデータの比較を趣旨とすることから、上に述べた I'm thirsty のようなケースは比較に困難を伴うので、今回のデータからは省いた。

また逆に、例えば形のうえで、Why don't you～ ?, Would you like to～ ?など Suggesting ととりえても、それが使われている文脈では明らかに Inviting の意味合いが強いといったような場合は、Suggesting のデータには含めなかった。Requesting においても同様のケースではデータから外した。そして３つのデータを比較しやすいように、Suggesting も Requesting も、それぞれ12通りの表現に項目を整理し集計した。

3．Suggesting に関して

Suggesting に関しては、Let's ～ . Shall we ～ ? How（What）about ～ ? ～ should ～ . Why don't you（we）～ ? I（would）suggest～．仮定法の ～would ～ . You might want to ～ . Do you want（Would you like）to ～ ? You（We）can ～ . You（We）could ～ . It might（would）be a good idea～．の12通りに項目を絞って、それぞれの表現の出現頻度を調べた。

まず2002年から2011年までのセンター試験からは、上の12通りの Suggesting の表現が83例出てきた。それぞれの数と割合を表にして示すと、下のようになる。

表１　センター試験の Suggesting の各表現の割合

Suggest の各表現	83例中の数	割合
Let's ～	19/83	23%
Shall we ～ ?	4/83	5%
How（What）about ～ ?	25/83	30%
～ should ～	11/83	13%
Why don't you（we）～ ?	12/83	15%
I（would）suggest ～	0/83	0%
仮定法：　～would ～	1/83	1%
You might want to ～	0/83	0%
Do you want（Would you like）to ～ ?	5/83	6%
You（We）can ～	4/83	5%
You（We）could ～	1/83	1%
It might（would）be a good idea ～	1/83	1%

How（What）about ～ ? Let's ～ . Why don't you（we）～ ? の順で割合が高いことが分かるが、これらは中学・高校で Suggesting の表現の例としてまず生徒に教えているようなフレーズと言えるだろう。

今度は、同じ12通りの Suggesting 表現が135例現れたネイティブデータでの各表現の割合を、表にして見てみる。

表２　ネイティブの Suggesting の各表現の割合

Suggesting の各表現	135例中の数	割合
Let's ～	7/135	5%
Shall we ～ ?	0/135	0%
How（What）about ～ ?	15/135	10%
～ should ～ .	63/135	47%
Why don't you（we）～ ?	12/135	9%
I（would）suggest ～ .	9/135	7%
仮定法：　～would ～ .	9/135	7%
You might want to ～ .	5/135	4%
Do you want（Would you like）to ～ ?	2/135	1%
You（We）can ～ .	5/135	4%
You（We）could ～ .	6/135	5%
It might（would）be a good idea ～ .	2/135	1%

センター試験に比べて How（What）about ～？Let's～．の割合がかなり少なくなっている。代わりに多くなっているのは should を用いている例であり、センター試験の13%に対し、ネイティブデータは47%と目立って多くなっている。またセンター試験では５%の割合で出てきた Shall we にいたっては０%であり、逆にセンター試験で０%であった I（would）suggest～．と You might want to～．が、ネイティブデータでは合わせて11%も出てきている。さらにネイティブは、「もし私だったら」などを含意する仮定法も、多彩に使っていることも窺える。

次に、同じ12通りの Suggesting 表現を178例収集した大学教材での各表現の割合の表を示す。

表３　大学教材の Suggesting の各表現の割合

Suggesting の各表現	178例中の数	割合
Let's ～．	30/178	17%
Shall we ～？	5/178	3%
How（What）about ～？	48/178	27%
～ should ～．	20/178	11%
Why don't you（we）～？	28/178	16%
I（would）suggest ～．	11/178	6%
仮定法：　～would ～．	6/178	3%
You might want to ～．	1/178	1%
Do you want（Would you like）to ～？	10/178	6%
You（We）can ～．	4/178	2%
You（We）could ～．	8/178	4%
It might（would）be a good idea ～．	7/178	4%

多い順は How（What）about ～？Let's ～．Why don't you（we）～？で、これはセンター試験と同じである。またネイティブデータで顕著に多かった should も、センター試験並みの割合になっている。

センター試験データ、ネイティブデータ、大学テキストデータの割合の数値だけを並べて比較してみると、さらに３つのデータの傾向が明らかになる。

表４　センターとネイティブと大学教材の比較（Suggesting）

Suggesting の各表現	センター	ネイティブ	大学教材
Let's ～.	23%	5%	17%
Shall we ～.	5%	0%	3%
How（What）about ～.	30%	10%	27%
～ should ～.	13%	47%	11%
Why don't you（we）～?	15%	9%	16%
I（would）suggest ～.	0%	7%	6%
仮定法：～would ～.	1%	7%	3%
You might want to ～.	0%	4%	1%
Do you want（Would you like）to ～?	6%	1%	6%
You（We）can ～.	5%	4%	2%
You（We）could ～.	1%	5%	4%
It might（would）be a good idea ～.	1%	1%	4%

並べてみると、センター試験と大学教材のデータの割合が全般的に近い数値を示していることが分かる。しかしその一方で、ネイティブデータである程度出てくる仮定法を含意する助動詞過去形が入った表現が、センター試験に比べて大学教材にもやや多く現れている。さらにセンター試験で全く出てこなかったI（would）suggest～．と You might want to～．も、大学教材では合わせて７％（12例）の割合を占めている。

４．Requesting に関して

Requesting に関しては、Will you ～? Would you ～? Can you（I）（we）～? Could you（I）（we）～? May I ～? Would（Do）you mind ～? Would it be（Is it）possible（OK）（alright）～? Do you think you（I）could（can）～? I'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～. I need ～. I was wondering if ～. Let me（us）～. の12通りに項目を絞って、それぞれの表現の出現頻度を調べた。

まず2002年から2011年までのセンター試験からは上の12通りの Requesting の表現は57例出てきて、それぞれの数と割合を表にして示すと、下のようになる。

表5　センターの Requesting の各表現の割合

Requesting の各表現	57例中の数	割合
Will you ～？	0/57	0%
Would you ～？	1/57	2%
Can you（I）（we）～？	14/57	24%
Could you（I）（we）～？	23/57	40%
May I ～？	2/57	4%
Would（Do）you mind ～？	3/57	5%
Would it be（Is it）possible（OK）（alright）～？	1/57	2%
Do you think you（I）could（can）～？	0/57	0%
I'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～.	7/57	12%
I need ～.	0/57	0%
I was wondering if ～.	2/57	4%
Let me（us）～.	4/57	7%

Will you ～？Would you～？が少なく、Can you（I）（we）～？Could you（I）（we）～？が圧倒的に多いことが分かる。そのあとはI'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～．次いでLet me（us）～．の順に多い。

次に、同じ12通りの Requesting 表現が151例出てきたネイティブデータの表である。

表6　ネイティブの Requesting の各表現の割合

Requesting の各表現	151例中の数	割合
Will you ～？	9/151	6%
Would you ～？	10/151	7%
Can you（I）（we）～？	55/151	36%
Could you（I）（we）～？	17/151	11%
May I ～？	19/151	13%
Would（Do）you mind ～？	7/151	5%
Would it be（Is it）possible（OK）（alright）～？	5/151	3%
Do you think you（I）could（can）～？	9/151	6%
I'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～.	1/151	1%
I need ～.	11/151	7%
I was wondering if ～.	3/151	2%
Let me（us）～.	5/151	3%

Will you ～？Would you～？よりも、Can you（I）（we）～？Could you（I）（we）～？の方が多いという点ではセンター試験と同様だが、ネイティブデータではCan you（I）（We）～？の方がCould you（I）（We）～？よりもずっと数が上回っている。ネイティブデータにおいて丁寧度の高い表現でよく出てくるものとしては、センター試験ではきわめて少ないMay I～？やDo you think you could ～？があげられる。またシンプルにI need～．をネイティブがよく使用していることも分かる。

次に、同じ12通りのRequesting表現を247例収集した大学教材での各表現の割合の表である。

表７　大学教材のRequestingの各表現の割合

Requestingの各表現	247例中の数	割合
Will you ～？	5/247	2%
Would you ～？	14/247	6%
Can you（I）（we）～？	65/247	26%
Could you（I）（we）～？	84/247	34%
May I ～？	16/247	6%
Would（Do）you mind ～？	18/247	7%
Would it be（Is it）possible（OK）（alright）～？	13/247	5%
Do you think you（I）could（can）～？	2/247	1%
I'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～.	16/247	6%
I need ～.	6/247	3%
I was wondering if ～.	4/247	2%
Let me（us）～.	4/247	2%

センター試験とネイティブで対照的だったCan you（I）（We）～？とCould you（I）（We）～？の割合は、大学教材ではセンター試験と同様、Could you（I）（We）～？の方がかなり高くなっている。では、センター試験よりもネイティブのデータの方に似ていそうな部分が見当たるかどうか、ここでRequestingにおいても、センター試験データ、ネイティブデータ、大学教材データの割合の数値だけを並べて、分かりやすく比較してみることにしよう。

表8　センターとネイティブと大学教材の比較（Requesting）

Requesting の各表現	センター	ネイティブ	大学教材
Will you ～？	0%	6%	2%
Would you ～？	2%	7%	6%
Can you（I）（we）～？	24%	36%	26%
Could you（I）（we）～？	40%	11%	34%
May I ～？	4%	13%	6%
Would（Do）you mind ～？	5%	5%	7%
Would it be（Is it）possible（OK）（alright）～？	2%	3%	5%
Do you think you（I）could（can）～？	0%	6%	1%
I'd（We'd）like（I'd（We'd）you）～.	12%	1%	6%
I need ～.	0%	7%	3%
I was wondering if ～.	4%	2%	2%
Let me（us）～.	7%	3%	2%

やはり全般的には、大学教材のデータは、ネイティブデータよりもセンター試験のデータの方にやや近い傾向が窺え、Suggesting の場合と違って、大学教材がネイティブと似ていると特に指摘できるほどの特徴は見つからない。

5．テキストの狙いによるデータの特徴の違い

概していえば大学教材のデータは、Suggesting においても Requesting においても、ネイティブデータにはあまり似ていない結果が出てきているが、ここで語用論的見地から大学教材を分類して、やや視点を変えた分析を行ってみたい。

コミュニケーション能力育成を目的とした英語教材を、スピーチアクトに対する意識の強さを基準にして4通りに分類してみると、

1．スピーチアクトの表現が、ほとんど出てこない。
2．スピーチアクトの表現が、何となく例文やモデルダイアローグに織り込まれている
3．スピーチアクトの表現が、Requesting, Suggesting, Inviting, Offering,　・・・と、意識的に羅列されていたり、章立てにしてあったりする。
4．3のタイプよりさらに語用論的意識を強くもって、ポライトネスの説明なども入っている。

という分け方が可能であろうが、1のタイプの教材はデータがほとんど集まらないので、そもそも今回対象にした14冊の中には入れておらず、データを収集したのはもっぱら2、3、4のタイプの教材からのみである。

まず2のタイプの教材を「スピーチアクトの意識なし」、それから3、4のタイプの教材を「スピーチアクトの意識あり」、と区分してみる。そして14冊中、2のタイプの7冊、3、4のタイプの7冊を選り分けて、Suggestingの各表現の割合を調べてみた結果、下の表のようになった。なお、表の中の項目で（A）は「スピーチアクトの意識なし」の大学教材、（B）は「スピーチアクトの意識あり」の大学教材を表す。

表9　センターとネイティブと大学教材（A）（B）の比較（Suggesting）

Suggestingの各表現	センター	ネイティブ	（A）	（B）
Let's ～.	23%	5%	29%	6%
Shall we ～？	5%	0%	3%	3%
How（What）about ～？	30%	10%	32%	22%
～ should ～.	13%	47%	7%	16%
Why don't you（we）～　？	15%	9%	21%	12%
I（would）suggest ～.	0%	7%	0%	11%
仮定法：　～would ～.	1%	7%	1%	5%
You might want to ～.	0%	4%	0%	1%
Do you want（Would you like）to ～？	6%	1%	4%	7%
You（We）can ～.	5%	4%	3%	2%
You（We）could ～.	1%	5%	0%	8%
It might（would）be a good idea ～.	1%	1%	0%	7%

「スピーチアクトの意識あり」の教材の方は、「スピーチアクトの意識なし」の教材に比べて、Let's ～., How（What）about ～？, Why don't you（we）～？が少なく、また一方で～should～.の割合は増えており、ややネイティブの特徴に近づいている。さらに　～would～.やYou（We）could～.などの助動詞の過去形が使われた仮定法のニュアンスをもつ表現がバラエティに富んできて、この点もネイティブに似てきている。つまり、スピーチアクトに意識的な教材から取ったデータの方は、ネイティブデータに少し傾向が近づいてくるという、興味深い事実が浮かび上がってくることが分かる。

6．結論と今後の展望

今回の調査では、データの比較がしやすくなることを念頭に置きながら、全体の大まかな傾向を見ることを優先した。つまり、個々の教材の狙いや意図を多少度外視したのだが、実際はコミュニケーションの力の養成といっても、教材によって狙いの重点、練習の手法は少しずつ異なる。ビジネスの場、海外旅行先、友だち同士など、どのシチュエーションを想定しているのか、それぞれの状況は異なるし、またどういう会話の練習のさせ方をし

ているのか、指導法のスタイルも異なる。

また一般に語用論的見地から言っても、例えばRequestingの場合、力関係、親疎のレベル、依頼の負担の度合いの違いに応じて、スピーチアクトの表現を使い分ける能力の養成が重要であり、今後は、どんな状況・文脈で、どんなスピーチアクト表現が使われることが多いか？という切り口で、もっときめ細かい調査・分析をしていく必要がある。そういった作業を積み重ねることによって、語用論的スキル、つまり状況に応じた適切なスピーチアクトの使用を身につけさせるための、より有効な教材・指導法の開発へとつなげていくことが可能になってくるはずである。

それぞれの会話の話題・状況と、出てくるスピーチアクト表現との対応状況を調べ、各教科書の狙い・設定により適切に応じたスピーチアクト表現の提案をしていくために、ネイティブデータベースとしてのスピーチアクトコーパスの活用が肝要となってくるが、さらにもう一つ、スピーチアクトコーパスが大学教材の改善に貢献できる大きな点は、ネイティブがより自然に使うコロケーションの提示である。

例えば、大学教材から収集したデータを見ると、依頼表現の定番であるmindを使うときの例文提示においては、Would you mindで始めるときはほとんど、動詞の～ing形を、そしてDo you mindで始めるときは必ず、if～の形をつなげている。ところがネイティブデータでは、Would you mindのあとに、～ing形が続くケースと、if～が続くケースがほぼ同数見られた。逆にネイティブデータで一つ出てくるDo you mindのケースでは、次は～ingが続いている。もちろんそれらのコロケーションの適正さを実証するためにはもっと膨大なデータの検証が必要であるが、Would you mind ～ ing？とDo you mind if～？とほぼ決めつけて定番化しているような例文の提示の仕方は、見直してもいいのかも知れない。

他にも細かいところで気がついた点を少し挙げてみると、ネイティブデータにおいて、shouldには、ニュアンスをやわらげるためのMaybeやI thinkが最初に置かれているケースが、非常に多い。またネイティブデータではMay Iにpleaseがついていることが多く、例えばCould youのあとにpleaseが続く割合よりもMay Iのあとにpleaseが続く割合が高かった。こういった色々な共起語頻度情報を明示化していき、自然な口語的コロケーションを教材に取り込むための提案をしていくこともまた、有意義なことである。

このようにスピーチアクトコーパスには、言語の実際の使われ方をより正確に反映した教材開発につなげていくための材料がまだまだ多く秘められており、それを有効活用することによって従来の英語教材の改善・発展に寄与する活路がさらに開かれていくことであろう。

［本稿は、2011年９月２日に大学英語教育学会第50回記念国際大会（於：西南学院大学）において行った口頭発表原稿に加筆・修正を加えたものである］

参考文献

Beebe, L. M., & Cummings, M. C. (1996). Natural speech act data versus written questionnaire data : How data collection method affects speech act performance. In Gass S. M. & Neu. J. (eds.) *Speech Acts across Cultures* (pp. 65–86). Berlin : Mouton de Gruyter.

Hartford, B. S. & Bardovi–Harlig, K. (1992). Experimental and observational data in the study of interlanguage pragmatics. In Bouton, L. F. & Kachru, Y. (eds.) *Pragmatics and Language Learning, Monograph Series*, Vol.3. (pp. 33–52). Urbana, IL : Division of English as an International Language, University of Illinois at Urbana–Champaign.

教学社編集部（2011）『センター試験過去問研究　英語（2012年版　センター赤本シリーズ）』教学社

石川慎一郎（2008）.『英語コーパスと言語教育―データとしてのテクスト』　大修館書店

水野康一（2001）「日本人英語学習者による語用論的能力の発達について」『香川大学経済論叢』第74巻第２号127－146

斉藤俊雄・赤野一郎・中村純作（編）（2005）.『英語コーパス言語学―基礎と実践』（改訂新版）研究社

清水崇文（2009）.『中間言語語用論概論―第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』　スリーエーネットワーク

Stubbs, M. (2002). *Words and Phrases : Corpus Studies of Lexical Semantic*. Oxford : Blackwell.

Suzuki, T. (2007). *A Pragmatic Approach to the Generation and Gender Gap in Japanese Politeness Strategies*. Hituzi Syobo Publishing.

Suzuki, T. (2009). *A Study of Lexicogrammatical and Discourse Strategies for 'Suggestion' with the Use of the English Speech Act Corpus.* The Cultural Review 34.Faculty of Commerce, Waseda University.

Suzuki, T. (2009). *How do American University Students "Invite" others? : A Corpus-based Study of Linguistic Strategies for the Speech Act of "Invitations"*. The Cultural Review 34. Faculty of Commerce, Waseda University.

Thomas, Jenny. (1995). Meaning in Interaction. London : Longman.

Widdowson, H. G. (2003). *Defining Issues in English Language Teaching*. Oxford : Oxford. U.P.